

【要約文】

現代日本語の条件を表わす複文の研究
ート条件節とタラ条件節を中心にー

宮部 真由美

この論文は、条件節を従属節とする従属複文のうち、ト条件節の従属複文とタラ条件節の従属複文について論じたものである。分析の方法として、分析対象である用例は、実際に用いられたものを広く採集して、分類・分析をおこなった。そして、ト条件節の従属複文と、タラ条件節の従属複文のそれぞれについて、互いに比較・対照ができるようなかたちで分析を進めた。

序論では、先行研究と本論文の分析の概要について述べた。

第1章では、分析の観点と概要について、本論の第Ⅰ部(第2章～第5章)でト条件節の従属複文について論じること、第Ⅱ部(第6章～第8章)でタラ条件節の従属複文について論じること、第Ⅲ部(第9章、第10章)で、本論文で手順テキストとよぶテキストにおいてト条件節とタラ条件節の従属複文がどのように用いられるのかということと、「継起」という特徴において、ト条件節、タラ条件節、シテ節(中止形節)の複文がどのような点で関係しているのかということ論じることについて述べた。

第2章では、従属節に「仮定条件」をさしだすシナイト節を従属節とする従属複文について論じた。ほかの条件節(タラ条件節、バ条件節)とは違い、シナイト節の従属複文の従属節には「望ましくないことがら」が「仮定条件」としてさしだされていること、この複文は「注意喚起」や「実現・実行してほしいことがらを述べること」のような発話における意味をもつことを述べた。さらに、主節の述語がスルの形をとることが多く、その場合に主節のモダリティが本論文で「未確認の断定」とよぶものであるという特徴もあげ、シナイト節の従属複文は、因果関係を述べるということを通して、発話の相手になんらかの行動をおこすというようなはたらきかけを行ない、さらに相手に行動を起こさせる(起こしてもらう)ための理由・説明をも同時に表わすという意味・機能をもつ複文であるということ述べた。

第3章では、ト条件節を従属節とする従属複文がすでにあることがらを表わす場合について論じた。この場合のト条件節は肯定形(スルト節)である。そして、スルト節の従属複文は従属節と主節のことがらが「同時・直前」の時間関係であり、この二つのことがらを一続きのものとしてとらえているということを表わす複文であるということ述べた。

第4章では、ト条件節を従属節とする従属複文がまだ起こっていないことがらを表わす場合について論じた。そして、第3章の分析とあわせて、ト条件節の従属複文の基本的(本質的)な特徴が、「従属節にさしだされることがらを完成したものとしてさしだすことをせず、先一後の関係にある従属節と主節のことがらをひとつづきのものとしてとらえていることを表わす(時間的な関係を表わす)複文である」ということを述べた。ただし、こうした

特徴から逸脱することにより、容易に条件的な関係を表わすものへと派生・分化するが、どのような場合に条件的な関係を表わすものになるかということについて、従属節の述語の形がスルトではないことや、従属節のテンス的な意味の点から分析したことを述べた。

第5章は、ト条件節を従属節とする従属複文の従属節とモーダルな側面について論じた。

第6章は、タラ条件節を従属節とする従属複文がすでにあることがらを表わす場合について論じた。そして、タラ条件節の従属複文の基本的(本質的)な特徴が「従属節と主節のことがらが条件＝時間的な関係であり、話し手(一人称)が従属節と主節のできごとを独立・個別なものとしてとらえ、従属節のことがらを完成したものとしてさしだす複文である」ということを述べた。また、すでにあることがらを表わす場合、ト条件節は肯定形(スルト)の形のみであるが、タラ条件節の場合は肯定形(シタラ)も否定形(シナカッタラ)でも表わすことができる点について論じた。

第7章は、タラ条件節を従属節とする従属複文がまだ起こっていないことがらを表わす場合について論じた。つまり、タラ条件節の「仮定条件」がどのようなものであるかということについて分析をおこなった。従属節も主節もモーダルな側面について分析を行ない、いくつかの意味類型がみられることを述べた。そして、これまでの研究では、まだ起こっていないことがらを表わす場合の従属節はひとくくりに「仮定条件」としてあつかわれてきたが、本論文で行なったように、「仮定条件」のなかがどのようなものであるかということを見ていく必要があることが確認した。

第8章はタラ条件節を従属節とする従属複文の従属節とモーダルな側面について論じた。

第9章は、手順テキストにあらわれる時間関係と条件関係の接続形式について論じた。特別なテキスト(家庭電化製品の操作が書かれた取扱説明書)におけるト条件節やタラ条件節の従属複文について、このテキストに現れるそのほかの時間関係を表わす接続形式(シタアト、シテカラ)や、条件関係を表わす接続形式(スルニハ、スル/シタトキ、スル/シタバアイ)との関係についての考察も行ない、それぞれの形式の特徴を述べた。

第10章は、スルト節、シタラ節、シテ節と継起性について論じた。「継起」という点で、ト条件節とタラ条件節とシテ節(中止形節)とは共通の特徴をもつといえることから、それぞれの複文がどのような点で「継起」という特徴をもっており、そして異なる形式・複文として存在しているのかということについて述べた。

結論では、ト条件節の従属複文とタラ条件節の従属複文は、基本的(本質的)な特徴については異なる複文であることを述べた。ト条件節の従属複文とタラ条件節の従属複文の基本的(本質的)な意味が次のようであることをまとめた。

- i. ト条件節の従属複文では、従属節にさしだされることがらを完成したものとしてさしだすことをせず、先－後の関係にある従属節と主節のことがらをひとつづきのものとしてとらえていることを表わす(時間的な関係を表わす)複文である。
- ii. タラ条件節の従属複文は、従属節と主節のことがらが条件＝時間的な関係であり、話し手(一人称)が従属節と主節のできごとを独立・個別なものとしてとらえ、従属節のことがらを完成したものとしてさしだす複文である。

そして、ト条件節の従属複文は、基本的には i の特徴をもつものの、それから逸脱することにより、もともとのト条件節の従属複文とは異なる関係を表わす複文となること、時間的な限定をうけないト条件節の従属複文は時間的な関係を表わす複文であるとも、条件的な関係を表わす複文であるともいえるものであること、さらに、このような複文の存在がト条件節の従属複文がタラ条件節の従属複文と比較・対照が可能な複文であるとみなされる要因であることについて論じたことをまとめた。